

テント一週一文 (つ) —— 紹介：フランスの環境大臣

(承前)

大分から来て「伊方原発をとめる 大分裁判の会」を紹介してくれた方が地下鉄入口に消えると、それまで黙って私たちの会話を聞いていた青年が「元気のいい方ですね」と、毒にも薬にもならないコメントを口にした。これはコメントの内容を聞かせるよりも、私はここにいますよ、と知らせるための発言だった。

「ほんとだね」とこちらも力の入らない言葉を返した。もう昼をずいぶん過ぎている。お弁当を早く食べたい気持ちが強くて、会話に力が入らない。

「日本の環境大臣を知っていますか？」と、まったく別のテーマを持ち出す。これじゃ弁当にはしばらくありつけないナ～。

「いや、知りません」

「フランスの環境大臣を知っていますか？」

「いや、知らない」と返事も杜撰になってきた。

「知っているでしょう。ほら7月中旬の『一週一文(ぬ)』にフランスの原発政策のことを書いていたじゃないですか」

◇一週一文(ぬ) http://npg.boo.jp/kieyuku/week_repo/170724kuriyama.pdf

「それは覚えているけれど、大臣の名前は知らないよ」

「ユローさんと言うのです。彼はもともとテレビのディレクターで、『ウシュアエア』という自然保護番組を送り出した方ですよ」

「ウシュアエア？」

「アルゼンティンの最南端の町の名前です。地球という惑星の最南端の町です」

「地球という惑星の？ また話が飛ぶね」

「ドイツ人はこういう表現がしゃれていると思っているのですよ。かなわないですよね」

「ドイツ人？」

「『フランクフルター ルントシャウ』という新聞の2017年7月25日の記事の受け売りです。次のリンクを開いていただけませんか？」

<http://www.fr.de/wirtschaft/frankreich-umwelt-realo-ruettelt-franzosen-wach-a-1319410>

「ちょっと待ってね。7月末の記事だったらもう削除されているかもしれないね…。ア、これか」

「ユローさんは、この番組の中で火山の噴火口を探ったり、氷の海を泳いだり、クラゲの群れに入り込んだり、ゴリラの家族と遊んだりして、自然保護の世界では名前を知られていた方なのですよ」

「エコ突撃隊だね」

「人気は抜群でしたが、緑の党では代表には選ばれませんでした。ところが、マクロン大統領が彼を環境大臣として迎えました」

「人気第一、一種のサプライズ人事だろうね」

「緑の党は、彼を政府の広告塔でしかないと見ていて、政治家とはみなしていませんでした。だから、ウローは手を縛られていて自由には動けないとか、政府内ではちょい役しか与えられないとしか、思われていなかったらしいですよ」

「だって、政治の世界じゃテレビディレクターが出る幕はないだろう」

「と思うでしょう。ところが、ユローさんは化けたのですよ。電力会社を握っているのは、日本では経済産業省だけど、フランスでは環境大臣だそうです。だから、原子力行政に強い権限を持っているみたいで、色々とやってくれたのです」

「ユローさんが化けたって、この前紹介した原発 17 基廃炉の方針のこと？」

「それも一つです。もっとも 17 基ってというのは決まったわけじゃなくて、多くなるかもしれないし、少なくなるかもしれない数値だそうです。フランス電力は、民間会社だから必ずしも政府の言うとおりにしなくてもいいのだそうですが、政府が株式の 4 分の 3 を持っているので、国の方針には逆らえないところがあるのだそうです。いわば、環境大臣を制する者が原子力政策を制する、っていうわけですね」

「それにしても、現在の原子力の比率 75% を 7~8 年の間に 50% まで下げるって非現実的な方針じゃない？」

「という見方もあるし、原子力ムラからも反論が出ているそうです。17 基って正式の会議で決まっていはいないじゃないか、という意見が強いみたいです。フランスは国内使用量を上回った電力を隣国に売っているんで、政府の統計局は 17 基が止まると 56 億ユーロって言うから、円だといくら？ 130 円だとして……約 7000 億円、の収入減になるって言うし、風力発電に変えるとすると 2 万 6 千基ほど建てなければならないって言う学者もいるそうです」

「じゃ、ユローさんは四面楚歌だ」

「ところが、少なくとも記事によると『みんな気候温暖化防止やエコロジーの理念には賛成しているのに、それらに直結する具体的な政策には反対。現実に目を閉じているのだ』と意気軒昂だと。それに、『オランダ前大統領もマクロン現大統領も、原子力の比率 75% を 50% にすると言っている、50% にするには 17 基は操業中止にしなければならない、これはエネルギー政策の問題ではなく算数の問題だ』と話しているそうです」

「ジャーナリストだから説明は分かり易いね」

「ユローさん、注目度の高い政治家に化けたことは確かですね。原発政策は、フランス国内の経済的・社会的な問題であり、原発王国フランスが稼働削減に向けて舵を切ったとはいえ注目はフランスに限定された話だったのです。ところが、このユロー環境大臣、今は国際的な注目もあびています」

「日本にも関係あるの？」

「あります、大問題になっています。『2040 年までにディーゼルとガソリンの自動車は販売しない、電気自動車(EV)にする』と発表したのです」

「聞いた、聞いた。このニュースを聞いた時には驚いたね。25 年先には自動車はみんな電気自動車にするって言うのだからね。フランスではそれはよく知られた考えなの？」

「それを聞いてフランス人も自分の耳を疑った、と書いてあるから驚いたんじゃないですか。ハイブリッドを含めて 98.8%の車を排除することになるそうですから」

「ここでもユローさんは四面楚歌だ」

「ところが、意気軒昂というか、泰然自若というか、慌ててはいないようです。『ボルボは 2040 年までに化石燃料使用自動車生産は止めるって言っているじゃないか』とか、『蓄電池の進歩は早い』とか、『水素だって使えるじゃないか』とか・・・」

「原発を 25%減らして自動車をみんな電気自動車にするって可能なかしら？」

「ボルボも 2040 年以降は電気自動車のみ生産するとは言っていないようです。しかし、ともあれフランスの環境大臣は、フランス電力とアレヴィ、ルノーとピジョウというエネルギーと自動車の二大産業を相手に丁々発止をやっているわけですよ」

「それはマクロン政権の方針なの？」

「おそらく、マクロン政権は、従来の原子力政策推進で遅れをとっている産業構造の転換に発破をかけているのではないのでしょうか」

「『フランスの眠りを覚ますユローさん 二つの発表で夜も寝られず』っていう訳か？」

「フランスは眠っていたわけじゃないですが、ともかくユローさんは、フランスを揺さぶっているようですよ」

「フランスはその揺さぶりに応えているの？」

「政府は二大産業の抵抗にてこずるのでは？と記事には書いてありますが、ともかくフランスでは、環境政策に関して政治が国民に大胆な改革を提言していることは確かですよ。イギリスも電気自動車主流に舵を切りましたし、中国もまもなく電気自動車を強力に推進するそうですし、フランスが環境立国のトップ集団に入るかもしれませんね」

「原発は縮小するし、排ガスはなくなるしで、世界は一步前進ということ？」

「絵に描いたように進むのは子ども向け漫画だけですよ」

「まだ若いのに悟っていますね」

「この記事は 7 月末なのですが、8 月上旬にはユローさん自身が 2025 年に原発依存率 50%達成は難しい、と発表したニュースもあるんですよ。一步前進と言うより、一步前進に向かって進もうとしている、って言うところじゃないのでしょうか」

「なるほど。ところであなたは、昼ごはんはもう食べたの？」

「私はランチですから」

「そうか、それで元気にしゃべれるんだ。僕はちょっと時間をもらってもいい？」

「どうぞ、どうぞ」

「有り難う。それじゃお言葉に甘えてしばらく休ませて下さい」

(文責 栗山次郎) 2017 年 9 月 25 日公開

◇参照：

<http://www.fr.de/wirtschaft/frankreich-umwelt-realo-ruettelt-franzosen-wach-a-1319410>

雑誌「世界」2017 年 9 月号掲載の赤木昭夫『脱原発！ フランスでも』でフランスの原発事情が紹介されています。